

ければどんな日にあうかわからないので、一日だけと言うので、私以下四人、列の前後に兵隊が警戒について出発。ところがもう一日もう一日、品物をやると言われ、それにつられた。四日目に昼食、休憩のため部落に停車したそのとき、皆と相談して逃げ出した。後から銃声が聞こえたが、なんの障害もなく、途中二、三回持っていた品物をうばわれたが、命からがら逃げ帰った。かくして冬を越した五月二十五日の朝、私は食糧買い出しに出た。突然日本に帰るのだから用意するようにと伝達があり、十二時出発、と言う。何も知らない私は収容所の近くにもどってくると、大勢、人が集まって、日本へ帰れるのだ、と言う。そのままその列に加わり、駅に行き、検査を受け、無蓋車に乗りこみそのまま一夜を明かし、翌朝コロ島に向け出発、三日がかりで着いた。六月四日、博多に上陸し、手続きをすませ、帰郷列車で帰った。

小さな目で―チチハルから

東京都 馬場 永子

当時、早生れの小学二年生。

八日だったと思うのです。飛行機が城外にバラバラと爆弾を落として去るのを防空壕から眺めていた。チチハルで。

父が帰宅し「協和会の建物の隣にも爆弾が落ちて一人死んだ」と。翌日行って見たら、一軒の敷地がスリバチ状に穴となっていたのに驚いた。

十一日朝、道一つへだてた軍の官舎の人が一人もいなくなっていて、「日ごろ軍民一致で戦おうといっているが、先に出て行くとはなんたること」と、大人たちがあきれていました。それで民間人も女、子どもは南下させようと十四、十五日と駅に集合し、停まっている汽車に乗せられていたら、父が迎えにきて「日本は負けたから、死ぬ時は一緒のほうがいい」と、みんなで住まいに

戻りました。

父は日本人会のせわでいそがしく、九月になってからは女は丸坊主で麻袋一枚しかもたず、それを縄で体にくくりつけているというのが野宿しながらやってきたとか、たいへんのものでした。

関東軍が逃げてしまったので、員数あわせとかの理由で男はつぎつぎと捕まり、父も連れて行かれました（生涯の別れ）。

独身寮に家族は移りましたが、だんだん一畳一人の割で詰めこまれるようになり、冬が過ぎ、春がきたら発疹チフスで死ぬ人が多くなって、そこがポッカリあくど広く感じられたときはびっくりしました。

なんといっても便所がすぐ一杯になるのに困りました。それを始末するのも男手が少なくて。また、ソ連兵への応待や、親のいない子どものせわとか、大人はたいへんみたいでした。

八路軍になって、お金を盗られた婆さんが「バーロにやられた」と叫んだら、すぐ二人のバーロがきて婆さんをつままえ、寮の裏の広場で銃殺したのを見ました。募集

されたバーロとかいわれ、恐ろしく思いました。

民衆裁判という嫌なものも見ました。

日本人で八路軍に指導者として入っている人もいると聞きました。

春になって、子どもたちもタバコ売りとか、なにかするのですが、盗られることもしばしばで、困り、そのうちに国語と算数だけの寺小屋が開かれました。

八月に引揚げが始まるのに、電柱にぶらさがった人（自殺）、お別れの駅に、満人の第三夫人になった娘さんが母と弟妹を見送りにきて泣いたり、また、開拓団からの孤児が、畑で離れてしまった弟妹を心配してウロウロしているのをかわいそうに思いました。

いま私は、三児を育てるときをへて、子らに、「一人で生きてゆける年齢よ」と宣告することがあります。

また、孤児のテレビ放送を見ていて「親が死んで、弟妹も死に、あなた自身は生きていて日本にこられたという事実、運がよかったんだと思ってもらえないかしら」とも、ひとりごとをいうのです。